皆様、今や世界は、国と国とが、民族と民族とが、憎悪と疑心暗鬼の中に、こんとんと渦巻いています。せめて狭い四つの島にひしめく九千万の私たち日本国民は、祖国を一つにする「はらから」として、もっと理解しあい、和(なご)みあっていけないものでしょうか？

私は日本の国が、そこに住むひとりひとりみんな、自分こそが悪いのだと謙虚におのれが足りなさを見つめ得る、悪人ぞろいの国になって欲しいと心の底から祈らざるを得ません。

夏の夜がふけて来ました。夜のしじまは反省の時です。ひとりひとりの深い反省と悔悟の中に、また明かるい希望の朝が訪れますように。

では皆様、おやすみなさい。

第五話　孤独を凝視(みつ)めて

今から十五、六年も昔のことになりましょうか、私が大阪にいたころのある日のことです。突然見知らぬひとりの婦人の訪問を受けました。けれども、会って話しております中に、見知らぬとは言いながら、私は、その婦人の名前を新聞などでしばしば耳にしていたことを思い出しました。その婦人というのは、当時、関西では相当に名の売れた舞踊家だったのです。年のころは三十もすでに半ばを越していたと思いますが、売れっ子の自信に満ちたはつらつたる気構(きがま)えの女性でありました。その有名な舞踊家が私を訪問したわけを尋ねようとしますと、それより先に、彼女自身問わず語りに次のように話してくれました。

「私は舞踊家なのですが、こんなに生きがいのある仕事は他にないと思います。この次にはあれを演じ、その次にはこれをひろうし……と公演の出物(だしもの)の構想を練るのですが、すばらしいヒントをインスピレーションのように思いついた時の喜びは、口では言い表わし得ないほどです。ところできょうお伺いしましたのは、ちょっとお願いがあってのことなのですが、実は、いつか近い

中に、中世紀風のキリスト教的な雰囲気を盛ったものをやってみたいと思いまして、その参考に、お宅の教会堂の内部を見せていただきたいのです。ステンドグラスを通して流れこむ五色の彩光に充ちたゴチック建築の内陣の美しさが、きっと私によいヒントを与えてくれると思いますので……」と、まあ、こういうわけなのでした。当時、私が主管していました大阪の川口の教会は、その後、戦災で灰燼に帰しましたが、明治十一年の建造で総欅作り、純粋のゴチック様式で、中でもフランスからはるばる取り寄せたステンドグラスのすばらしさは筆舌に尽くし難いものがありました。私は喜んで、その婦人を教会堂に案内し、溜息のような感嘆詞を連発している彼女をそこにひとり残して書斎に引き返し、中断された仕事を続けていましたが、しばらくたって、彼女は再び私の部屋に姿を現わし、机の前の椅子に腰を降ろしてそれからおよそ一時間ばかり、自分の生きがいのある人生の喜びをとうとうと私に話して聞かせてくれたことでした。やがて、その婦人を玄関に送り出し、ホッと一息ついて、再び仕事の続きに取りかかろうとした矢先です。またしても、ドアにノックの音が聞こえて、今度は私がよく知っているひとりの青年が飛び込んで来ました。ところが、その青年はしばらく、私の顔を黙って見つめていたと思うと、たちまちその顔をクシャクシャにゆがめて、いきなり私の机に顔を伏せ、激しく泣き始めたものです。しばらくはポカンとしてあっけに取られていた私が、ようやく我に返ってだんだんと事情を

問いただしてみましたところが、どうやら、その青年は失恋をしたらしいのです。心に深傷をおうて、私の所に泣きに来たのでした。ようすがわかりましたので、私は安心して、泣きたいだけ泣かせておけとまた私の仕事にとりかかりました。が、突然、ハッと何かに気づいて思わずペンをおきました。

私が何に気づいたかおわかりになりますか？　それは一つの不思議なコントラスト……つまり、ほんの五分ぐらい前には、その同じ椅子に同じように腰を降ろしたひとりの女性が、「生きるということはすばらしいことですわね。」と繰り返しながら、長々と生きることの喜びを私に語ってくれたのでした……だのに、その同じ椅子で、今度はひとりの青年が、「僕はもう生きてるのがいやになった。」と身もだえしながら泣いている……ということでした。

世の中にはしあわせな人も、不幸な人もある……これはきわめて当たり前のことですね。けれども、私は、その時、フト思わざるを得なかったのです。いったい、生きるということは幸福なのか、それとも不幸なのか？　この青年とあの女性と、いったいどちらが人間の真実な姿なのだろうか？　と。

そして私は、その時、さきほどあの婦人と対座していた時のことを考えました。ゴチック聖堂の神秘に心打たれたこの女性、これも神のみ摂理が私のもとに導き給うた一つの魂ならばと思

い、何とかして、心に触れあうものをお互いに感じたいものと何度か努力をして見ましたが、その度毎に、私の心は喜びにはち切れそうな彼女の胸の壁にぶつかってむなしくはじき返されるのでした。結局、一時間余りの対座で、私の心に残されたもの、それは、何かそらぞらしいもの、ただ、それだけであったのです。けれど、今、人生の淋しさに泣くこの青年には、私は何かしらしみじみとしたもの、何か溶け合うものを感ずるのです。これは、そもそもどういうことなのでしょうか？

あの女流舞踊家は「生きることはすばらしいことですね。」と繰り返していました。その瞳は喜びに輝いていました。けれど、私は、その瞳の中に、聰明な人生の英知ではなく、子供のような無知の色を見たのです。今の刹那（せつな）の喜びに満足するものの、浅い知恵の色を見たのです。健康で、若くて、美貌で、才能に恵まれて、人々の称讃を浴びて……などなど、そういうときに「生きることはうれしいことだ。」とはだれでもが言えるのです。けれども同じ女性が、もう二十年も経って、若さを失くし、人々の浮雲のような称讃から忘れ去られるとき、その時にも、なお彼女は、「生きることはうれしい。」と言うでしょうか？　いや、彼女はまだその時を考えてはいないのです。あるいは、フトそれに気づくことがあったにしても、彼女は、恐らく、その忌わしいおのが影に急いで目を閉じるのでしょう。そして、その代わりにつかのまの今の自分の姿をし

いて大きく見つめながら「ああ生きることはしあわせだ」と言うのです。

私が彼女との対談に、何かそらぞらしいものを感じたと思ったのは、そこだったのですね。人間の真実の姿に目を閉じて、人生の仮の姿に歓喜の声をあげる……それは「架空の喜び」に過ぎません。少し意地の悪い言い方をするならば、それは、一つの「嘘（うそ）」なのです。

それでは皆様、人間の真実の姿とはいったい何でしょう。もしも人間のこの地上の姿だけを見つめるなら、私は人間のひとりひとりの中に宿命のようにこびりついている一つの暗い不吉な影を認めざるを得ないのです。その影、それは「孤独」ということです。きのうまで、ヤンヤのかっさいを博した横綱が、その力の限界に来たことを思い知らされたときの、悄然とした孤独の影を、私は涙なしには見ることができませんでした。はなやかな脚光を浴びる人々を取り囲むファンの群の、きびしい冷たさは、生きることの真実の姿を暴露（ばくろ）しています。世の中には、親子、夫婦、友人など、人と人とを結びつける堅い絆があるように見えます。けれども、やがて、年老いた時、改めて、私たちの周囲を眺めるなら、あの強いと見えた絆が一つ一つ次から次へと断ち切られていくのを、じっと涙をのんで見送らねばならないでしょう。何ものも、いかなる権力も富も愛情も、私たちの絆の断ち切られるのを防ぐことはできません。そして、ついに、臨終の床に最後の苦しみをもだえるのは、あなたひとり、それは残酷なまでに徹底的にあなたただひとりの

世界なのです。諸国遍歴の巡礼者が背中にかけたすげ笠に、たとえ同行ふたりと書いてありましても、しょせん、この世は私たちにとって、ひとりひとりの孤独の旅路……それが人生の真実の姿なのです。

それでは、生きることは悲しいこと、不幸なことなのでしょうか。ただの悲哀、ただの寂寞なのでしょうか。

いいえ、とんでもないと私は申し上げたいのです。考えてもごらんなさい。今から十数年、あるいは数十年前、私たちはどこにも存在していませんでした。全くの絶対的な無であったのです。思っただけでもゾッとするような虚無の深淵……私は、いや私はなどというその私も存在していなかったのですが……永久に虚無であってよかったのです。だのに、フト物心づいた時、私はこの世に人間としての生を得ていました。虚無の深淵から存在の光明の中に置かれたのです。「私」というこの全人格をもって私は存在を始めたのです。越えるはずのなかった虚無と存在との間の無限の深淵を乗り越えたのです。これが無意味なことでしょうか？　これがただ淋しさや悲哀などであってよいものでしょうか？

皆様、今、ソッとあなたの胸に手をおいてください。そして、あなたの生命の息吹きの中にあなたご自身の存在を確かめてください。絶え間なく脈打つ心臓の鼓動が……そして呼吸する度に

ふくらむあなたの胸が、何かをあなたにささやいてはいませんか？　いや、それはささやくなどというなまやさしいものではありません。叫んでいるのです。絶叫しているのです。あなたの注意を促して、あなたの反省を求めて……「早く早く、私が未だ鼓動し続けている間に……」「どうぞ、私が未だ呼吸し続けているうちに、早く見つけてください。この生命の意義を……生きるということの真の意味を……」と叫びながら、それは、あなた全体をゆすぶっているのです。

皆様、生きるということのこの世の姿は、確かにきびしく淋しいものですね。孤独に生きて、やがて年老い、そして、死に絶えるこのいのち……けれども、この真実の姿に目を閉じてはいけないのです。大きく目を見開いて、それをしっかりと凝視しましょう。ほんとうの、心の底から勃然として湧き起こって来る生命の歓喜は、その真実の姿の凝視から生まれてくるものなのです。この世の悲しみに泣くその涙を通して獲得する喜びこそがほんとうの生きる生命の法悦なのです。貧しかろうと、病んでいようと、人に侮られようと、年老いようと、私は、なお目をうるませて叫びたい、「生きるということはなんてすばらしいことなのでしょう」と。

静かな夜です。皆様、この世のいのちは、生きるに値いするものだと理解しようとは、お思いになりませんか。

では、また来週のこの日まで。おやすみなさい。

第六話　考える葦

もう一羽、もう一羽だけと思ったのがまちがいのもとでした。私の腰には予想以上の獲物がすでにぶらさがっていましたのに、欲というものは恐ろしいもので、目の前に飛び立った一羽の山鳩の羽ばたきの音を耳にした途端、矢も盾もたまらなくなったのです。銃を構えて、そっと、やぶの茂みに一歩踏み込みました。獲物を捕えれば、すぐにでも元の道にとって返すことはぞうさもないことでした。無意識の中にも、元の道へ出る方角だけは頭の中で確保しているつもりでした。だが、それから、ものの二十分も、一羽の山鳩を追っかけて、すっかり夢中になり、とうとう最後に獲物を仕留めて、私のほおに浮かんだ快心の微笑は、しかし次の瞬間にヒヤリと凍りついてしまいました。私は忙しく、頭の中で、道からそれてからの私の行動を思いめぐらしてみました。わからなくなったのです。全然見当がつかないし、何の目印もありません。が、ボンヤリしていてもしようのないこと、私は意を決して、身の丈ほどもある笹籔をかき分け、一直線に進んで行きました。やぶは深くなるばかりです。もしかして反対の方角だったら……私はゾッとし